

## 奥四万十山の暮らし調査団



## ■地域資源としての地名

財団の2018年度助成金支給事業の一つ、奥四万十山の暮らし調査団による調査報告書『四万十の地名を歩く』がこの4月に上梓された。本書の目的は、四万十川流域の住民の記憶に残る地名や伝承、生活の記憶などの「民衆知」を聴き取り、後世に書き残すことにある。また、地名にまつわる地域の歴史や文化の記憶を聴き取り、文字としての地名を「生きた地名」として記録し、地域資源として活用できる基礎的資料を提供することにある。

調査団のある高知県に限らず、平成の大合併では多くの旧地名が失われた。そして合併後の新自治体名には、地域の成り立ちや文化を無視した、単に今っぽい名称が多く付けられている。地名は大地に刻まれた記憶の語り部。伝統的な建物や工芸・芸能などが文化財として重用されているのに、地名はほんざいな扱いだ。それはもったいない、地名が本来持つ意味を記録にとどめようと、WEBサイト「四万十町地名辞典」を開設（2015年）。それをきっかけに地元の人々が集まり、地域資源としての地名の可能性を村落史研究の立場から探ってみたい、そんな思いで結成されたのが本調査団だった。

## ■メンバーが四万十川流域で広く聴き取り

本書『四万十の地名を歩く』（全166ページ）は、調査団としての調査報告書第3冊。今回は、高知県西部・四万十川流域の梶原町、四万十町、四万十市をフィールドに調査団のメンバーが行った調査の成果をまとめたものだ。

## 「住民による農山村の民衆知の記録と伝承」

『地域資料叢書19 四万十の地名を歩く』—高知県西部地名民俗調査報告書Ⅱ、津野庄・幡多庄故地現地調査報告書Ⅰ—

聴き取り調査の様子



各集落に伝わる行事や文化なども紹介されている。



地域資源地図として森下嘉晴氏による絵地図も紹介されている。

梶原町町組の棚田

第1章「四万十の地名を歩く」では、四万十町で使われている約6千の地名を語彙別に分類し、地名の分布から集落の生業を読み解いた。

第2章「四万十の村々を歩く」は、四万十市2集落（口鴨川・江川）、四万十町3集落（金上野、下津井、小野）、梶原町（町組）などでの聴き取り調査の成果。集落それぞれの歴史や伝統行事、祭礼などを写真入りで紹介している。

第3章「地域資源地図で見る四万十」では、流域の地名や民俗の調査をふまえた5つの地域資源地図を紹介。まち歩きにも活用される絵地図が殊勝だ。

第4章「四万十の地名を考える」では、高知県の熊野神社、戦国期の上山郷（大正・十和地区）と海の領主の関わりに関する2論考と、佐賀越えと呼ばれる大正—佐賀をつなぐ古道の踏査成果、大正中津川の関札調査の2報告を掲載している。

■小さな地名の生み出す価値

調査団代表世話人の武内文治さんは語る。

「地域の地理情報は災害対策や国土利用などに有用性が認められ、国は衛星と連携した地理情報システム（GIS）を進めています。県下に10万を超える小字こあざなどの小さな地名も、ビッグデータを活用することで発見が生まれます。一方で、部落地名の問題などから、自治体は小字データの公開には消極的です。昔を知る高齢者が存命のうちにと、聴き取り調査を急いでいますが、まとめ作業が追いつかない状況です。そうした悩みを抱える小さな団体の活動ですが、ご支援をいただき感謝しています」